

聖書:ダニエル書24～49節

説教:神々の中の神、王たちの主

はじめに

南王国ユダは、紀元前605年にバビロンに包囲され、主だった人たちは強制的にバビロンに補囚という身分で連れ去られてしまいます。その中にいたのが、当時まだ少年であったダニエルでした。

彼はやがて成長し、王に仕えることになります。そのネブカドネツアル王があるとき夢を見たのですが、学者たちが夢の意味を説き明かすことができないと知ると怒り狂い、死刑の宣告を告げ、まったく関係のないダニエルも巻き込まれて、殺されそうになる。しかしダニエルはあわてず騒がず、「必ず夢の意味を説き明かして見せますから」と言って王から時間をもらい、家に戻って神に祈ります。そうするとその夜、幻を見たダニエルは、主から王が見た夢と夢の意味をすべてを教えていただいた。それが前回までのあらすじです。

結局、ダニエルは王の見た夢の意味を説き明かすことができたという功績によって大出世を果たします。いったいなぜ神はこのようなことをなさったのでしょうか。神のみこころを考えていきます。

1 天に秘密を明らかにするひとりの神がおられる

ネブカドネツアル王の前に進み出たダニエルは、「夢の意味を本当に説き明かすことができるのか」と問われて、こう答えます。26、27節。「王が求めておられる秘密を王にお示しすることは、知者や、呪文師、呪法師、占星術師などにはできません。しかし天に秘密を明らかにするひとりの神がおられます。この方が終わりの日に起こることをネブカドネツアル王に示されたのです。」

ここで注目したいのは、ダニエルが、夢の意味を説き明かすことができるの天におられる神だけであると語っているところです。これを聞いているのは信仰をもっていないネブカドネツアル王です。そしてここは自分が助かるか殺されるかの瀬戸際なのです。いのちを助けてもらうために、水で薄めたような言い方をしてしまっておかしくありません。でもダニエルはそうしません。真理をそのまま語ります。

2 王の見た夢

1) これから起こること

このようなやりとりをしてから夢の解き明かしが始まります。三つのことに絞ってみたいと思います。

一つ目は、29節です。「王よ。あなたが寝床で思い浮かべていたのは、これから起こることです。秘密を明らかにされる方が、これから起こることをお示しになったのです。」

当時、バビロンは世界で最も栄えていた国でしたから、バビロンが金でできた頭であるということは、王さまに対するお世辞ということではなく、事実そのものでした。問題はその後です。そんなバビロンもやがて滅び、第二、第三の国が起こつていくとダニエルはズバリ語る。これは、バビロン王にとっては都合の悪いニュースです。先ほども言ったとおり、ダニエルにはいのちがかかっていますから、王の機嫌が悪くなるようなことは言わない方がよい。ところが彼は、神が教えてくれたことを淡々と語りす。王が怒り出すかどうかは気にしていないようです。確かにダニエルが語ったことは本当だったということは、歴史が証明しています。バビロンはやがて滅び、次にペルシャという国が出てくる。そのあと様々な国が続いて、やがてローマ帝国が登場していくのです。

2) 心の思いをご自身がお知りになるため

二つ目は30節です。「この秘密が私に明らかにされたのは、すべての生ける者にまさって私に知恵があるからではなく、その意味が王に告げられることによって、あなたの心の思いをご自身がお知りになるためです。」

自分のことは自分がよくわかっている。だいたい多くの方はそんなふうには思っています。でも、本当にわかっているのだろうか、と疑ってみた方がよい。例えば、今のように外に出られず、この先のことでも不安を抱えながら友だちにも会えない日が続くとストレスがたまります。いらいらして、ちょっとしたことで家族と衝突してしまう。頭ではやっちゃんいけないと分かっている、カッとなった感情は抑えられない。どうしてなのでしょう。自分のことが分かっているなら抑えられるはずではないですか。

ネブカドネツアル王は富も権力もあらゆるものを持っていました。それだけ持っていたら安心して幸せに暮らせるはずと思う。ところがそうではなかった。王には一つだけ欠けていたものがあつ

た。自分の心の思いを知ることができなかつたのです。学者たちを呼んでも、人の知恵では解き明かせませんでした。それが分かったとき、王は感情をコントロールできなくなるほどうろたえてしまいます。

ダニエルは、人の心を知ることがおできになるのは、人にはできない。天におられる神だけであると語りました。それは、私たちは神によって心のうちにあるものを教えていただかなければ、本当の平安は得られないと言うことだったのです。

3) この国は永遠に続きます

そして三つ目は44節です。「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国はほかの民に渡されず、反対にこれらの国々をことごとく打ち砕いて、滅ぼし尽くします。しかし、この国は永遠に続きます。」

ダニエルの時代、誰もがバビロンの繁栄は永遠に続くと思われて疑わなかつたでしょう。しかしやがてペルシャが現れ、それも消えてローマ帝国に移る。そのローマ帝国も滅び、今は私たちが知っている世界になっています。アメリカや中国など大きな国が仲良くしているとは到底言えない。まさに鉄と粘土のように混じり合わないで、お互いを不信の目で見ています。この先はどうなるのかと人々は不安を感じています。そのような世界に私たちは生きています。

でもダニエルは将来のことについて明確に語りました。やがて天の神は一つの国、神の国が起こしていく。その国は永遠に滅ぼされることはない。この国は永遠に続く。さきほどはバビロンが滅びることは言い当てたけれど、神の国はほんとうに来るのでしょうか。

答えは聖書に書いてあります。ダニエルの時代からおよそ600年後に書かれたマルコの福音書の1章15節で、主はこう語りました。「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」ダニエルが語った神の国は、神のひとり子である方が人となって私たちのところへ来られたとき、開始されていきました。それは今どうなったのでしょうか。神の国はどこにも見えません。では失敗したのか。そうではない。主が教えてくださっています。ルカの福音書17章20, 21節「パリサイ人たちが、神の国はいつ来るのかと尋ねたとき、イエスは彼らに答えられた。『神の国は、目に見える形で来るものではありません。「見よ、ここだ」とか、「あそこだ」とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。』」

ません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。』」

神は私たちに信仰を与えてくださり、私たちのうちに既に神の国が立てられていたのです。もちろんまだ完成してはいません。でも今も神の国の完成を目指して働き続けています。完成したときに、ダニエルが語ったことは成就していく。そのことを今私たちは待ち望んでいるわけです。

3 神のみこころ

1) バビロン王が主を知る

ダニエルが語り終えたとき、王はこのように告白します。47節。「あなたがこの秘密を明らかにすることができたからには、あなたがたの神こそ、神々の中の神、王たちの主、また秘密を明らかにする方であるに違いない。」

当時、世界の中でもっとも権力をもっていたネブカドネツアル王が神をほめたたえていく。これは奇蹟と言っていいでしょう。どうしてこのよな事件が起きたのか。不思議と言えば不思議ですが、少なくとも言えることは、バビロン王が主を知るためにこのようなことが起きたと説明することはできるでしょう。

2) ダニエルが主のみこころを知る

それだけではありません。視点をダニエルに向けてみましょう。彼は死刑だと言われたとき、どう思ったのか。あるいは、王に対して「あなたの夢を解き明かして見せますから時間をください」と願ったとき、大丈夫だという自信があつたのか。いいえ、そんなものはない。ダニエルだって先が見えないのです。自分は、祖国から遠く離れた外国で殺される。冷静に考えれば、そうなるほうの確率が高かつたのです。夜の幻のうちに王の夢の秘密が明らかになったときでさえ、自分が助かつて無事であるという保証は何もありません。王の前で、バビロンは滅びると言わなければならないのです。それを言った途端に殺されることだって十分あり得た。そうしますと、ダニエルは最初から最後まで自分が死ぬことを覚悟しながら語っていたことになる。なぜそうできたのでしょうか。

王の夢の解き証しをしながら彼自身が教えられたのではないのでしょうか。自分は今日殺されるかも知れない。でも、天の神はやがてこの地上に神の国を打ち立ててくださる。神の国が永遠に滅びないのであれば、そこには死はもはやない。自分が死んだとしても、永遠のいのちの与えられる国に自分は迎えられることになる。

そのことを証しするために、今神は自分をいよいよとされている。主が用意してくださった道であるならば滅びで終わることは絶対はない。そのような信仰を与えられていったのではないのでしょうか。だから彼はできた。そして私たちはそんなダニエルの歩んだ道が、実は主イエス・キリストが歩まれた道とそっくり同じであったと気がつきます。

3) 苦難のとき、先にあるものに目を留める

私たちは、いま先の見えない道に放り出されて右往左往している状態です。そのようなときこそ、私たちの心のうちにあるものが明らかにされてきます。何もないときは「主を信じます」と気軽に言えたのに、今はどうですか。信仰はどこかに吹っ飛んで、うろたえてしまっただけではなかったか。それが悪いと言いたいわけではありません。うろたえるのは当然です。右往左往するのはあたりまえ。主の弟子たちだってそうだった。それが私たちの本当の姿だったのです。コロナの騒ぎを通して、本当の姿を私たち自身が知らされていく。それが主のみこころだったのかも知れません。ならばどうするのか。おろおろしてしまっている裸の自分のままで、主の前に進み出ればよいのです。異教の神々を信じていたバビロン王さえも救おうとされた神だったのです。まして主の前で小さくなっている私たちを救わないはずはない。必ず主の助けがあることを信じます。